

二次元ぶち文庫

トマツシユ♥デビルズの 大冒険



試し読み版

大熊捏喜
表紙イラスト：トイト

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『トラッシュ・デビルズの大冒険』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



トテツシユ♥デビルズの大冒険

大熊狸喜
表紙／トイト

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

アイリーン

地球連邦の対外犯罪取り締まり局所属の特別捜査官。細かい作業や思考よりも、銃を撃って解決する猪突猛進タイプの少女。愛称はアイリ。

フミ

アイリと同じ特別捜査官。戦闘力は低いですが、細かい洞察力や宇宙船などの操縦に長けている知性派少女。アイリをサポートする。

グルム

「黒い秋」のリーダー。様々な惑星の女性を誘拐し、他の惑星に売りさばいている。

西曆三四五六年。

地球には様々な異星人たちが移り住み、地球人たちもまた様々な他惑星へと進出している、宇宙大交流時代——。

直径が約一光年の太陽系の、更に十倍ほどの宙域が、地球星の完全自治領域である。

そんな宇宙空間で今、地球連邦政府のスターシップが、地球へと向かう他惑星所属の貨物宇宙船を追跡していた。

追われる船は、地球と外交のあるペロノム星からの貨物船で、全長五百メートルを超えるオタマジヤクシみたいな形の大型船。

その船内では、大柄で醜いカエルみたいな体躯たいくのペロノム星人が、広いブリッジでニヤニヤと邪な笑みを浮かべている。

「船長、地球星の船がついてきますぜ」

「ケケっ、パトロール船か。どうやら密輸の情報が漏れていたらしいな。野郎ども、いつも通りの強行突破といこうぜ！」

男たちは、邪眼をギラつかせた。

後を追う地球の船は、全長が二百メートルほどの中型船「ヒノマル号」。

細くて優しい砲弾型の曲線と、後部の大型ロケットが造るメリハリのあるシルエット。

サイズは標準的だけど、その姿は優雅で、ちよつと可愛い印象だった。

純白の船体は、遙か遠い太陽の光をキラキラと反射させている。

宇宙では近距離である十キロまで接近した純白のスターシップは、境界宙域への侵入を許可された貨物船に対し、警告を告げた。

『ペロノム星の貨物船、ペロノムリユン号さん。一旦停船してください』

通信機を通して告げられた公用宇宙語は、ドコか優しくて丁寧な、若い女性だと分かる愛らしいボイス。

しかし警告を受けた貨物船は、スターシップの通信に対し、停船はおろか何の返信もない。それどころか、航行速度を上げてゆく。

『待ってください。ココは地球の領域です。停船命令を無視すると、武力を以て強制的に——』

更に停船命令を発したら、件の貨物船は、なんとビームで攻撃。

——ビュ————ンッ！

撃ち出された赤い光線はハッキリと、純白の船のエンジンを狙っていた。

亜光速の光線を、十キロの距離で避ける事など出来ない。

「ケケっ、迂闊うかつに近づいたお前らがアホなのさつ。地獄で間抜けを後悔しな！」
思わぬ奇襲攻撃にして、ハッキリとした迎撃の意志。

狙い澄ました射撃に、スターシップのエンジンが撃ち抜かれて撃沈。

かと思われた瞬間、白亜の船体は絶妙なキリモミで、ビームをかわしていた。

「なにっ!？」

この近距離でビームを避けられるなんて、思ってもいなかった男たち。

貨物船に偽装した密輸船のブリッジは、軽く混乱する。

予想外の事態に対し、更に多数のビーム攻撃を重ねてきた。

「ええいつ、どのみちコッチの正体はバレてんだっ。構うこたあねえつ、撃つて撃つて撃ちまくれいつ！」

——ビュンビュツ、ギユ——ンツ!

巨体のアチコチから放たれる光線が、無数の針の如く、純白の船を集中攻撃。

しかしスターシップは襲い来る全ての攻撃を、ヒラリヒラリと見事にかわす。

その操船テクニクは、神業にも均しい。

更にさつきとは別なる、強気でちよつとガサツな、しかし綺麗な少女の声。

『コラッつ、あんたたちっ! 停船しなさいって言ってるでしょつ! 命令聞かないんなら、どてっ腹に穴開けて乗り込んでやるんだからからねっ!』

最後通告らしい一言を発すると、止まないビーム攻撃をかわしながら、スターシップが大きく旋回。

偽装船の横っ腹に正面を向けたと同時に、全速力で突っ込んできた。

「せつ、船長っ！ 地球星の船が……っ！」

アイパッチを着けた部下が船長に報告した時には、純白の船が数発のビームを発射。

エンジンルームと貨物室の間、通路の区画だけを狙った、正確な射撃だ。

直撃を受けた巨大な船体が激震すると、ビームによって開けられた穴に、スターシップが尖った鼻面を本当に突っ込んできた。

「ななっ、なんてムチャしやがるっ！」

こんな強行突入、ヘタをしたら中型船の方が木っ端微塵^{みじん}だ。

動揺する船内が、数秒と待たず更に混乱。

「何だっ、どうしたっ!？」

「船長っ、地球星の船から地球星人が二人、船内に侵入しやしたっ！」

警報轟くブリッジのモニターには、艦内で展開されている銃撃戦の映像。

爆炎に浮かぶ襲撃者のシルエットは、どうやら二人で、小柄な少女に見えた。

「何してやがるっ、たかが地球星人の女二人なんだろうがっ——」

太った船長が部下たちを怒鳴り散らしていたら、ブリッジの入り口が勢いよく吹っ飛ばされる。

密輸組織の男たちの前に現れたのは、本当に二人の少女。

「そうら、あんたたち。観念して銃を捨てなさいっ！」

両掌にハンドブラスターを構えて仁王立ちの少女は、燃えるような真っ赤な髪を、ポニーテールに纏めていた。

艶めく長い頭髪がお尻まで流れていて、強気そうな瞳が綺麗につり上がっている。

小顔に対してボディは見事で、九十六センチのバストにキュッと括れたウエストと、デーンと大きく発達したヒップ。

ムチムチの腿は、タツプリと脂を乗せていながら引き締まり、細い足首までのラインを存分に見せ付けていた。

声や言葉遣いからすると、最後通告をしてきた少女らしい。

背後から、小型のビームガンを両手持ちする少女が現れた。

「みなさんが密輸団である事は、既に情報を得ております。あなた方には黙秘権があり、弁護士を雇う権利も——」

丁寧で優しい言葉の少女は、青空のように爽やかなブルーの髪を、マシユマロみたいなショートカットに揃えていた。

大きな瞳が優しく垂れていて、眼鏡も知的で愛らしい。

プロポーシオンは、赤髪の少女と同じく起伏に恵まれた魅惑的なライン。

大きなバストに細い腹部。官能的に拡がった臀部は、シルエットだけでも男の情欲を刺

激する。

何より、二人お揃いの衣装が、その肢体をより肉感的に引き立てていた。

素材は、極薄いメタリックのような艶々。

トップはスポーツブラのように、大きなバスト以外の、ほぼ全ての肌を露出している。

巨乳の深い谷間も、細くて白い背中も、スベスベの若い肌を惜しみなく披露。

縦長のおへそも完全露出で、ボトムに至ってはハイレグTバック。

ほとんど剥き出しな艶々のお尻が、プルンと柔らかく揺れていた。

手袋とガンベルトとブーツを装着していなければ、大胆なビキニ姿にしか見えない。

というか、犯罪現場には全く似合わない、十代後半らしい少女たち。

そんな二人に、直後、密輸団の男たちは更に驚かされる。

「ああ、まだ名乗ってなかったわね。これも形式ってヤツだわ。名乗ってあげる」

そう言っつて、赤髪の少女は両掌のプラスチックをクルクルと廻した。

「あたしたちは、地球連邦の対外犯罪取り締まり局の特別捜査官。あたしはアイリーン」

「私は、フミと申します」

ペコりと頭を垂れる、眼鏡の捜査官。

メタルビキニの垂れ目少女が、続けてニッコリと微笑んで告げた。

「みなさんが持ち込もうとしている薬品は、地球連邦の法律で違法薬物に指定されており、

持ち込み禁止の麻薬に該当いたします」

「どうせ裏ルートで売りさばこうってんでしょ？ 地球で犯罪やろうなんて悪人たちは、人呼んで純白の美麗連邦捜査官『ビューティー・フロレンズ』が許しはしないわっ！」

ポニテ捜査官が得意げに名乗ると、男たちの間に衝撃が走った。

「ゲゲえっ、こいつらが噂の『トラッシュ・デビルズ』うっ!？」

「なっ、何だつてええええっ!？」

それなりに修羅場を潜ってきた犯罪者たちが、一斉に青ざめる。

男たちの言葉を、通称アイリが訂正。

「ちよちよっとっ、トラッシュ・デビルズじゃないっ！ あたしたちのコードネームはビ

ューティー・フロレンズだつてば!」

優雅な名称で自己紹介したのに、返ってきたのは犯罪者たちがつけた、あだ名だった。

目の前の二人の正体を知って、大柄なカエル船長も焦りを隠せない。

「は、犯罪者は全て地獄送りという、極悪非道の二人組いっ！ たった一人の万引き男を

捕まえるために大都市一つを壊滅させた、あのトラッシュ・デビルズだとおおおっ!？」

おののいて絶叫する船長。言われたアイリは怒って反論。

「違うわよっ、アレはチョコロチョコ逃げ回る犯人の方が悪いのっ。しかもアンタ、盗んだ

のは選りに選って、銀河最高芸術クラスの宝石とまで言われた——」

とまで言ったトコロで、恐怖にかられた船長が、裏返った声で命令を下した。

「やっやっ、野郎どもっ、ぶっ殺せっ。何としてもこの二人をブチ殺せええっ！」

「ちよっと、人の話をっ——ひやっ！」

船員たちが銃を手に手に一斉攻撃。

銃撃される二人の捜査官は、壊れた扉の陰へと慌てて身を潜めた。

「ああもうっ、あいつら目がマジだわっ！」

「どうしましよ、アイリい？」

扉を盾にしているけど、このままでは廊下側にも敵が来て、挟み撃ちにされる。

「こうなったら取るべき道は一つ。カエルのボスをとちめてやるわっ！」

そう決意した赤髪少女が、ブラスターを両掌に敵陣へと身を躍らせた。

「わわっ、来たぞ、撃て撃てえっ！」

矢継ぎ早なビームの群れをかくぐり、アイリはブリッジのシートを蹴って高く跳躍。

「ハっ！」

メタルビキニを纏った扇情的な肢体を旋回させながら、中空で両腕を拡げる。

ブリッジの各所で銃撃する多数の標的たちを一瞬で見定めると、空中回転しながら両掌

のブラスターを連射した。

——っビュギュギュギュギュンっ！

遠心力の影響で、ビキニの巨乳が砲弾型に柔らかく変形。艶めく白い肌が汗を散らす。単なる乱射みたいな射撃はしかし、全てのビームが男たちの手足に命中。一発たりとも外れてなどいない。

「うわっ！」

「ぎゃあっ！」

船内重力で床に着地をすると、今度は疾走しながら複数の敵を射撃。二人四人と、犯罪者たちを沈黙させてゆく。

射撃では捜査官一の腕前を誇る、アイリりの独断場だ。

一方で扉の陰に隠れるフミは、恐怖に目を閉じて、小型ビームをただ乱射。

「やあああんっ、こないでくださいさっ！」

廊下側に押し寄せた犯罪者たちに応戦するものの、ビーム一発かすりもしない。

怯えて座り込んだ格好だから、ムチムチの腿の間には、メタルなビキニを食い込ませた股間が、艶々に形を浮き見せている。

「なんだあの女。あんなんでホントに捜査官なのかあ？ ゲッゲッゲ」

カエル笑いな犯罪者たちがナメきっていたら、乱射したビームを浴びて脆くなった天井がドカンと崩れ落ちた。

次々と部下を倒されてゆく船長は、追い詰められて、あり得なさすぎる行動に出る。

「くっそうっ、トラッシュ・デビルズめっ。こうなったら地獄に道連れだあっ！」

血眼の犯罪者が、偽装船の自爆スイッチを力一杯叩いたのだ。

「あっバカっ！」

焦ったアイリが止めに入った時にはもう遅く、モニターではカウントダウンを開始。

「あと三十秒で、この船ごと木っ端微塵だあっ。ザマア見ろっ、トラッシュ・デビルズうっ！ ゲッゲッゲッゲッ！」

自暴自棄で笑う船長は、憎き敵を道連れにできる勝利の確信と共に、笑って自決。

「わっっ、勝手に死んだっ！ ！ またあたしたちのせいにつ——ああんもうっ、フミっ、あたしたちも急いで脱出よっ！」

「はっいっ！」

銃撃では全くと言っていいほど役に立たなかった眼鏡少女だけど、いざ操船となった途端、落ち着きを取り戻す。

自爆の警告で混乱する船内を二人で逃走しながら、リストウオッチタイプの操船機を使い、出入り口のロックを解除。

ハッチからスターシップにダイビング。

と同時に、フミは俯せのままでも素晴らしいテクニクで、数秒と待たずに偽装船との距離を、五キロも開けた。

「ここまで離れば大丈夫です。爆破の衝撃が来たってなんのその、ですわ」

言った途端、偽装船は巨大な火球となって自爆消滅。一緒に犯罪者たちも、全員消滅。こうして、地球に麻薬を持ち込もうとした密輸組織は壊滅し、地球の平和は護られた。

「あゝあ……密輸団、みゝんな死んじやったわ……また主任のお説教かなあ……」

「うゝん……今回の事案は、ボスを追い詰めちゃったアイリの責任、ですわ」

「なに言ってるのよつ、そもそもアンタの停船命令が弱々しいから——」

天才的な射撃の才能を誇るアイリと、神業な操縦テクニクと知性に勝るフミ。

この二人が「ビューティー・フロレンズ」として、地球に食指を伸ばす犯罪者たちから日夜、人々の平和を護っている。

本部に帰還するまで、擦り合いの口論が続いたのだった——。

対外犯罪取り締まり局は、地球領内で起こった、他惑星人によるあらゆる犯罪に対し捜査逮捕の権限を持つ、地球連邦直属の機関。

その本部は、母星である地球にあった。

スペースポートに帰還した純白のスターシップは、そのまま地下の格納庫に移動。機体の洗浄とメンテナンスを受けるのだ。

一方で二人の少女捜査官は、機密チューブを通って検疫ボックスへ。

「レイプは怖いかい？ やっぱり処女は楽しいぜえ、グツへへハハハっ！」
処女膜を弄ばれて、笑われる。

少女たちの自尊心が更に惨めに穢されて、へし折られて踏みにじられていった。
会場中が、破瓜の瞬間を見ようと注視している。

そして地球を護る二人の少女捜査官に、ついにレイプの瞬間が訪れた。

「さて、トラッシュ・デビルズの処女剥奪といこうか。クッククック」

笑った男たちは、抱いた開脚の裸尻を下ろしながら、自らの勃起を突き上げてくる。

「ひいっ——っ！」

極薄い皮膜が中に向かって押されると、少女たちの心は恐怖一色で支配されてしまっていた。
いた。

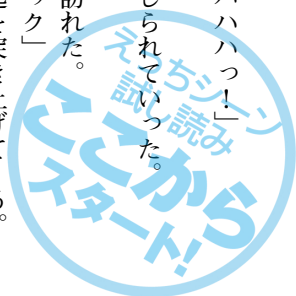
捜査官の耳に、犯罪者が囁く。

「オレの右腕を撃ち抜いた事を詫びれば、処女剥奪は許してやろうか？ クッククック」
犯罪捜査官に向かって、逮捕した事を詫びる、と言っている。

（誰が、そんな事……っ！）

弱々しい理性は抵抗するものの、しかし処女の肉体は、許しを求めてしまっていた。
ネバラの声が聞こえたらしく、フミもストーリーカーに哀願の言葉を要求されている。

「フ、フミもお、ゴホフさん愛してますってえ、言ってみなア」



「そ、そんなつ——あうつ！」
しゅんじゅん

逡巡すると、更に勃起が押し込まれて、処女膜が限界まで張り詰められる。

数秒の葛藤の末、二人の強い意志が、自尊心が、自らの少女心にヘシ折られた。

犯罪者に向かつて詫びる、ポニテ捜査官。

「う、腕を、撃ち抜いて……ご、ごめん……なさい……」

そして眼鏡少女も。

「ゴ、ゴホフ、さん……あ、あ愛、して……いますう……」

惨め。泣きたいほど、惨め。

犯罪者から地球を護る特別捜査官の自分たちが、レイプされる恐怖に負けて、許しを請

うてしまったのだ。

自らの尊厳を自ら否定させられてしまった事で、少女たちの心が音を立てて、完全倒壊

させられてゆく。

(でも……これで……)

レイプだけは、許して貰える。

そう思った瞬間、二人の処女が犯された。

「クックック、笑えるぜ」

——つつぷつつ！

「っ——っ痛い痛い痛いっ！」

「あ愛してるなら、抱いてあげるんだナァ」

——っツプりっ！

「っいいやああああああっっ！」

二人の少女捜査官は、犯罪者たちの観覧する陵辱ショーの舞台の上で、同時に処女を奪われてしまった。

アイリの潤う膣孔から、フミの濡れ肉孔から、綺麗な喪失血が一筋溢れる。

(そ………んな………っ！)

犯罪者を恐れ、詫びて、あげく犯されてしまった自分たち。

教えられてしまった破瓜の激痛だけでなく、騙された自身が悔しくて惨めで、気力そのものまでもが消失させられてゆく。

会場中の画面には、許しを請う愛顔と処女と一緒に画面にアップで映し出されて、しかも破瓜の瞬間を何度もリピート。

「うひよおおおっ、トラッシュ・デビルズのファーストファックだあっ！」

「捜査官のクセに犯されてやがるぜえっ、ヒヤッヒヤッヒヤッ！」

犯罪者たちの罵りに、二人の心はただ泣くこと以外、もう何も出来なかった。

M字開脚で開かれた初めての桃色秘処が、黒くて太い勃起を更に奥へと呑み込まされて、

「いやっ、あはあああつ——つか、身体ああつ、かららがあああああつ！」
望まぬ肉感に身体を染められてゆくアイリの近くで、フミも同じ、女の淫獄へと墮とさ
れてゆく。

「フ、フミのしよじよおお、ボクが、犯したんだナア」

「ついあああつ——ついいつ、痛い、ですううつ——っ！」

ストーカーに犯された哀れな処女孔が、穢れた陵辱勃起によつて、更に奥を占領されて
ゆく。

「やめ、て……くら、さひい……はひ……は、あああああ……っ！」

根元まで詰め込まれてしまうと、眼鏡少女の子宮口までもが肉突破された。

粘膜よりも過敏で弱い入り口を犯された途端、フミの女体は痛みが溶けて、知らない性
感を自覚させられてゆく。

「あああああつ——なにか……おなか……あついひ、ですう……！」

エモノ少女の反応に満足するストーカーが、己の欲求を満たすためだけの、強い勃起突
きを開始する。

「フ、フミのマ○コ、味わうんだナア」

——つぎユリユむチゅっ、ツぶづプづプづぶづプヂゅっつ！

女に慣れた黒い肉棒で、初めての艶桃姫処が蹂躪されてゆく。

「ひいひいっ——っあひっ、いやっ——いやれすふうふうううっ——っ！」

フミもアイリも、お互い悲鳴を、犯されながら聞かされる事しかできなかった。

「フっ、フミひいひいっ——あっ、あんたたちひっ——あはあああああああっ！」

アイリの口からは強気な言葉が吐かれるものの、既に語気は負け惜しみのそれではな
く、更に言葉尻は快感の艶吐息。

犯罪者に犯されてしまった、自分たち。

両腕を拘束する頭上の鎖がジャラつと軋んで、少女たちを更に惨めに引き立てている。

「どうしたあ？ 悔しかったらオレたちを逮捕してみろよ、クッククク」

捕らえられて開脚強姦に晒されるポニテ捜査官の女体が、更に前方へと突き出され、犯
罪者たちに見せ付けられた。

「いやっ——やめてええっ——つくはあああっ、カララがあっ——っ燃えっモへちやふう
うううっ！」

男たちの視線が粘膜に突き刺さると、更に女体が恥辱で燃やされてしまう。

膣壁から子宮までを何度も肉往復されて、飢餓感がより大きく熱膨張させられてゆく。
女の肉体には決して存在しない、堅くて太くて長くて熱い、牡の肉棒。

初体験の肉体が、膣壁が、子宮が、更に脳裏までもが、その存在感と圧迫感と絶対的な
重さを、容赦なく刻み込まれてゆく。

女の子宮は、男性を受け入れるその為だけに存在する。

強姦者による恥辱レイプなのに、そんな歪んだ認識で、二人の女体本能が満たされていた。

涙を見せる瞳が性感に蕩け、頬も美顔も羞恥に上気。

突き上げを甘受する女体は二つの巨乳を大きく跳ねさせ、照明の下、小さな汗をチラチラと散らす。

「あああああああつ——ネバラつ、ネバラふううううつ——つ！」

吐息の全てが官能に染まり、もはや抵抗の言葉までもが、愛しい恋人を呼ぶ喘ぎでしかない。

嫌悪するストーカーに犯されるフミも、どうしようもない恥辱の沼へと、深く深く沈められてゆく。

「ゴつ、ゴホフさつ——ひはあああああんつ——つそんなにひつ、されたらはあああああつ！」

知的な垂れ目が官能で濡れて、艶めく唇からは涎が一筋。

力強い勃起突きを受ける女体は細い腰をくねらせて甘受し、巨乳は縦長の楕円を描いて見せ付ける。

心臓は限界まで鼓動を強め、上気する肌曲面は性熱の汗で官能的に彩られていた。

「あたっ——あたひいひいひいひいっ！」

耳の奥では鼓動だけが鳴り響き、挿挿する犯罪者たちの歓声も遠くに感じる。

自慰では決して得られない快感がこの先にあると、女の肉体は本能で悟り、更に強姦者への服従で肢体と媚尻をくねらせる。

広い少女腰は完全に脱力をして、強姦魔のペニスをただ従順に吞まされ続けていた。

強姦と恥辱に震える二人の肢体は、男の性欲と女の本能に吞まれ、抗う事も出来ない。

強姦の肉棒を受け入れるアイリの膣壁は、無数の髪と粒でネバルのペニスを抱き締めて奉仕。

新たな蜜を溢れさせて、更なる肉突きをオネダリしている。

ゴリラの強姦魔に犯されるフミの膣粘膜も、絞り込むようなうねりの奉仕で、陵辱者に服従していた。

「おなかはっ——あああああああっ——おなかはっ、あたまがはっ——つとけてしまひいっ、ますふうううううっ！」

騙されて、犯されて、強姦者による公衆レイプで女の身体に染められてゆく、自分たち。

「ひいひいひいひいひいっ——つおなかっ、いっばひいひいひいっ——つこんなっ、いやああっ——つやめへえええええええっ！」

熱くて堅い肉で一突きされる毎に、子宮の飢餓感が暴力的に、膨らまされてゆく。

少女たちの、ヒップ突き出し絶頂恥態に、男たちは淫らな興奮。

「うひょっ、怪物に犯されてイってるぜ！」

「なんて淫乱だあつ、ゲへへッ！」

犯罪者たちの嘲りを聞きながら、二人の脳裏に強烈なフラッシュバック。

ムリヤリ初体験をさせられた強姦魔の、男根の形と熱と重さと存在感が思い出され、絶
対の快感として、女体神経の隅々にまで覚えさせられてゆく。

「っ——フ、フミいいいいっ!!」

「っアイっ、りいいひいいっ!!」

瞳孔が開かれて、女体の本能が理解する。

このまま犯されて絶頂させられてしまったら、もう男性器には、決して逆らえなくされてしまふ。

本来、女性が出産という苦痛に耐える為に本能的に持っている、被虐的な感情。

その本能を、最も惨めな、強姦の快感こそが最上だと、徹底的に刻み込まれてゆく。

まるで、純白の白紙に汚濁の墨で書き記されてしまふように。

「やめへえっ——っやらあああつ！」

地球の人々を護るため駆逐すべき犯罪者たちに、強姦されてオモチヤにされて、精液まみれにされる自分たち。



「ひいひいっ——っそんなああああっ！」

淫惨な強姦陵辱こそが、自分たちの全存在なのだ、無意識どころか本能のレベルで、理解させられてしまう二人。

しかも理性を残したままという、女の自尊心が自らの身体によつて碎かれる、最も残酷で淫極な、女体調整。

(そ、そんな……っ！)

絶対に受け入れられなどしない恥辱。

それなのに、現に今勃起触手を突き込まただけで、肉体は悦楽にも似た喜びを、脳でまで感じている。

無条件で染め堕とされてゆく恐怖に、碎かれて粉にされた僅わずかな理性が、絶叫。

フミは大きな垂れ目で涙の哀願。

しかしその言葉は、蕩けて真逆だった。

「ひいひいっ——いやっ、いやれふうううっ——きやはうっ——ツペニフうっ——っ
 いいっれふううんっっ！」

アイリの悲鳴も、もはや抵抗どころかオネダリにしか聞こえない。

「強姦——ごふかんっ——ひきゆうがっ、とろけひやうっ——っあつくてラメへえっ！」
 ポニテ少女の粒粘膜が、眼鏡少女のヌリユ膺壁が、怪生物の勃起を締め付ける。

途端に、調整絶頂に向かって激しい触手責めを開始された。

——つづぷぬルちユつづつ、づぷゆ又ちユるプリユぶづぷづぷちゅッッ!

激しく旋回する太い熱触手で、膣口から膣壁、子宮口までを連続姦通されて、更に子宮壁がトストスと激しく連打。

「んぶうううううううううう——んはっはひいいつ——っひんりゃふううううう——っひきゆうがもへてっ——つあたひひんりゃふうううううううううううッ!」

赤髪のポニーテールを振り乱して、絶頂責めに晒されるアイリ。

暴力的なまでの未知なる快感で、もう自分が何を言っているのかすら、分からない。

勃起突きされる女体では、二つの巨乳がタップタップと盛大に前後して、美顔は絶頂のアへ顔を淫媚に晒す。

「おかつ、おかされっ——あきやはっ、はひいいつ——っわたくひまたっ——またイかされへっ——つあたまっ——っいきっ、いきくるつてへっ、しまひまふうううううううううううッ!」

開脚させられたフミの美脚が、更に限界まで勝手に開いて、犯される秘処を自ら晒す。

大きな眼鏡は恥汗で濡れて、艶めく唇からは透明な涎が、二筋も流れていた。

少女たちの脱力女体が更に触手で締め上げられると、それだけで更に、被虐の快感が高められてゆく。

「あたひいくのっ——んぶっ、ペロっ——おチンチンっ、おいひいよおおおおおつ!」

口内のペニス触手が、臭くてニガくて愛おしい。精液臭しかない媚薬を、舐め取ってコクコクと溜飲するアイリ。

「わたしもっ、れふうううっ——つみなさまあつ、フミのいくっ——っんあはっ——いくっ、ごらんっ、くらさひいいいっ！」

惨めにされればされるほど、フミの女体快感が、どうしようもなく高まってゆく。

二人の粉理性は恥辱に吞まれて、子宮も女体もただ、男性器のみがくれる熱重い存在感だけが、全てにされる。

胎内の強すぎる飢餓感で狂ってゆく女体。

瞳孔まで開いた涙の瞳に映るのは、地下空間ではなく、頂点が近い眩い虹色。

耳に響く犯罪者たちの嘲りや罵りで、女体全ての神経が更に過敏な性感帯へと、絶対的に染められてしまう。

消滅させられてゆく理性が危機感に焦燥しているのに、女体はただ敗北の悦楽しか、欲していないかった。

「わたくひいっ——つもうラメへっ、れふううううっ！」

青色髪の少女が敗北宣言をすると、赤毛の少女も無意識に同調。

「いくううっ——つあたひもっ、もつとごふかんっ——いきたいいいいっ！」

突き出し裸尻で開脚させられた半裸の肢体が、小刻みに震えて絶頂寸前を魅せる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>